

老人の生活意識に関する研究

居宅・独居・施設老人の意識調査をとおして

安藤 順一

On the Consciousness of the Aged in their Every Day

Junichi ANDO

緒 言

ポーヴォワールはその著『老い』のなかで次のように書いている。「あらゆる人間はやがて死ぬべき存在である。彼らの多くは老人となる。しかし、この転身を考える者はほとんどいない。老いほど予期されてしかるべきものはなく、老いほど思いがけなく来るものもない。……しかし、成人はあたかも決して老いることがないかのように振舞う。」(9頁)と。

事実、今だ老いに達していない者にとって老人は全く異人種のように思えるであろうし、老人自身も自己については余り多くを語らうとしない。このことが両者の心理的交流を不十分にし、そしてまた、老人に対する接し方を画一的なものにしていく原因にもなると思う。ある施設の老人は言う。「浪花節、流行歌をひっきりなしに放送しないでほしい」と。そこには、老人は浪花節を好むものだ。そして浪花節をながせば老人は喜ぶだらうという単純な発想があるように思われる。

周知のように、厚生省人口問題研究所『日本の将来人口推計』によれば、総人口のなかでの65才以上の人口比率は、昭和25年4.9% (410万9千人)であったものが、昭和90年には18.5% (2571万3千人)になるという。この数値は日本の社会が急速に老令化社会へ進みつつあることを示すものであり、このために必要な社会保障体制の検討、および老人福祉対策の検討が目下なされつつある。老人は長い間社会の進展に尽してきた者として敬愛され、心身共に健やかな生活が保障されなければならないのは言うまでもないが、そのためには特に老後の生活にはりあいが持てるような対策が必要である。

このようなことを思うとき、「老後の生きがい対策」は大きなはりあい感を老人に与えているものである。すなわち、現在125ヶ所(昭和52年度)と増加した高令者無料職業紹介所における就労あっ旋、また、老人の孤独感・不満感の解消に役立った全国107948ヶ所の老人クラブ(昭和51年度)への助成や老人スポーツ普及事業、老人のための明るいまち推進事業、さらに老人クラブ指導者・家庭奉仕員の研修会への補助事業などがこの生きがい対策の内容であるが、これらによって老人のはりあい感はたかめられている。

しかし一方、高年令人口が増大しやがては働き手1000人が老人ひとりを抱える社会になると、およびその社会では、老人扶養の困難さが問題として生ずること、などにより「長生きの危険」「世代間戦争」といったことばが言われたしている。そしてこの世代間戦争では、身体的にも経済的にも力をもたない老人がつねに敗れていくのである。このような社会的状況と老年期に多くみられる抑うつ傾向とが老人の生活を不安にし、時には自殺へと追いやっている。昭和48年度日本の老人自殺死亡率(65才以上人口10万人対)は17.3で、先進諸国の中間を

占めるようになったが、75才以上の死亡率は女子73.7、男子87.4で世界第3位である。そしてこの死亡率は昭和42年度の自殺死亡率（男57.7、女45.9）を上廻っていて、決して低くなってはいないのである。言うまでもなく、老人の自殺の原因はいろいろ考えられるが、その背後には『厚生指標』（第24号、第12巻）が指摘するように、社会面・精神面での孤独感、ひいては生きがい感がもてないということに帰着する。

それでは、どうしたら老人に生きがい感をよび戻すことができるのであろうか。それはつねに老人のニードを把握し、きめ細かな対策を考えていくこと。そして、そのニードを外見的客観的にみてその状態の回復・改善が必要なニードと、老人自身がもっている内面的主観的なニードに分けるならば、この主観的ニードを十分に熟慮し、ニード充足の方法を考えていくことがきめ細かな対策には必要であらう。そして、老人のニードを把握するために、本年度はまず、老人の日常生活における意識を質問紙法によって調査した。

調査内容と調査対象

調査内容は、①現在の生活に対する老人の満足感について、②老人のほりあい感について、③老人にとって「してほしいこと」、「やめてもらいたいこと」、の3つであり、それぞれに次のような仮説をたてた。すなわち、仮説①居宅老人は施設老人に比べて満足感をもっている者が多いであらう。仮説②独居老人は集団生活をしている居宅老人や施設老人と比べてほりあい感をもつ者が少ないであらう。仮説③居宅老人・独居老人・施設老人ごとに、それぞれ「してほしいこと」、「やめてほしいこと」の内容が相違するであらう。ということである。

調査対象は65才以上の老人とし、筆者在住の岐阜地区の居宅老人250名、独居老人150名、施設老人100名に調査用紙を配布した。配布方法は岐阜市庁福祉課に助力を仰いだ。福祉課では民生委員又は施設職員をとおして各老人に配布した。

調査期間は昭和52年10月20日より11月15日までとし、11月15日現在、手もとに回収された数

表1 調査用紙回収人数

年 齢		65~69	70~75	76~79	80~85	86~89	90~	計
在宅老人	男	35	29	14	11	2	0	91
	女	28	15	14	9	4	2	72
	計	63	44	28	20	6	2	63
独居老人	男	3	3	7	0	1	0	14
	女	16	16	14	7	1	0	54
	計	19	19	21	7	2	0	68
施設老人	男	4	1	6	2	0	0	13
	女	7	4	3	4	0	1	19
	計	11	5	9	6	0	1	32
全老人	男	42	33	27	13	3	0	118
	女	51	35	31	20	5	3	145
	計	93	68	58	33	8	3	263

は表1のとおりである。回収率は居宅老人65.2%，独居老人45.3%，施設老人32%である。

さらに、回答者を卒業学校別に分類すると小学校卒191人（居宅111人，独居96人，施設24人），中学校卒52人（居宅40人，独居6人，施設6人），高専以上卒20人（居宅12人，独居6人，施設2人）である。言うまでもなくこれらはすべて旧制の学校である。

現在の生活に対する老人の満足感について

老人の満足感については次のような形式で尋ねた。『いまの暮らしについて、あなたは満足していますか。次の項目のうち、あてはまるものに○印をつけてください。イ.満足している。ロ.満足していない』なお、独居老人には『ひとり暮らしになられて、どう感じておられますか。次の項目のうち、あてはまるものに○印をつけてください』と問い、表5のとうな7つの選択肢を設けた。これは独居の老人に満足しているかと直接問いかけることが躊躇されたからである。

調査結果は次のようである。

表2 独居・施設老人にみられるくらしの満足感

選 択 肢	居 宅 老 人						施 設 老 人					
	男 子		女 子		計		男 子		女 子		計	
イ満足している	82	50.6	65	40.1	147	91.3	9	32.1	11	39.2	20	71.4
ロ満足していない	7	4.3	7	4.3	14	8.7	2	7.1	6	21.4	8	28.6

左=実数 右=%

表中の実数は、無回答者があるため調査実数とはあわない。これによれば、いまの暮らしに居宅老人では91%，施設老人では71%の者が満足していると答え、不満足の原因をあらわす者は居宅老人8%，施設老人28%である。また、 χ^2 検定の結果では、学歴や年齢による有意な差は認められなかった。

それでは、満足・不満足の原因は何であらうか。まず満足の原因については表3にまとめた。

表3 居宅老人にみられる足満足の原因

選 択 肢	60代		70代		80代		計		
① 大事にされている (大事にしてくれる) のは誰れですか	イ 息子	34	53.9	35	49.2	23	82.1	92	56.7
	ロ 嫁	24	38.0	30	42.2	22	78.5	76	46.9
	ハ 孫	13	20.6	15	21.1	10	35.7	38	23.4
	ニ その他	7	11.1	9	12.6	2	7.1	18	11.1
② 自分の部屋がある	32	50.7	38	53.5	17	65.3	87	53.7	
③ 自分に使う金がある	33	52.3	36	50.7	16	57.1	85	52.4	
④ 食事に気をくばってくれる	18	28.5	30	42.2	16	57.1	64	39.5	
⑤ 家族だんらん的时间がある	25	39.6	25	35.2	15	53.5	60	37.0	

選 択 肢		60代		70代		80代		計	
⑥ 自分のする仕事がある (その仕事は何ですか)	園芸	17	26.9	16	22.5	9	32.1	42	25.9
	留守番	8	12.6	10	14.0	3	10.7	21	12.9
	掃除	6	9.5	7	9.8	3	10.7	16	9.9
	趣味	14	22.2	15	21.1	3	10.7	32	19.7
	その他	11	17.4	12	16.9	3	10.7	26	16.0
⑦ その他		9	14.2	7	9.8	2	7.1	18	11.1
人 数		63		71		28		162	

左=実数 右=%

表の中では90才代の女子2人は80才代に加えた。

この表から次のことがうかがえる。

▼項目①「大事にされている」を満足の原因として肯定したものは、回答者162名中154名であり、大事にしてくれる人は息子または嫁が多く、孫がそれにつづいている。この他に大事にしてくれる人として、妻、家族全部、娘があげられている。

▼残りの8名は、項目⑥「自分のする仕事がある」を肯定し、その仕事として園芸・趣味的なことがあげられ、表中の仕事以外には農業・自営業・老人クラブのリーダーが満足感の原因となっている。

▼項目②「自分の部屋がある」、項目③「使う金がある」には50%以上が反応し、精神的な自由さと経済的な安定さといったものが満足の原因となっている。

▼項目④「食事に気をくばる」、項目⑤「だんらの時間」は40%近くの老人が肯定している。

▼項目⑦「その他」では、年金がもらえる、奉仕活動をしている、家族の世話(子守り)をしている、などがあげられている。

▼さらに、「満足していない」に反応した14人の居宅老人をみると、・息子から大事にされない、・嫁から大事にされない、・だんらの時間がない、・やる仕事がない、などの項目に反応していて、家庭内での不安定感が不満の原因となっている。

以上のような諸傾向とひとりひとりの反応傾向をみると、居宅老人においては、周囲の者から大事にされているかどうかということ。また、仕事があるかどうか、ということが満足感・不満足感の原因の根底にあるようである。そして高令者になるにつれ、大事にされていることがより多く満足感につながっている。

次に、施設老人における「満足している」の原因を表4にまとめた。

施設老人においては回収率が低く、これでもって全体を推し量ることは無理だと思う。しかし大体の傾向をうかがえば、・身体のことを心配し親身になって世話をしてもらえること、・話し相手がありのんびりした生活ができること、が満足の原因として考えられる。

一方、施設老人にみられる不満の原因は、・気をつかうことが多い、・他人から干渉される、・見たいテレビが見られない、・職員から面倒をみてもらえない、などであり、施設の老人にとっては、同一のことがらがある者には満足感となり、ある者には不満感となっているようである。

表4 施設老人にみられる満足感の原因

選 択 肢	人数	%
① 話し相手がありなぐさめられる	11	34.3
② 職員が親身になって世話をしてくれる	10	31.2
③ 身体に気をつけてもらえる	16	50.6
④ のんびりした生活ができる	13	40.6
⑤ 碁や将棋などができる	0	0
⑥ ためになる話が聞ける	6	18.7
⑦ 趣味の勉強ができる	7	21.8
⑧ 食 事 が よ い	5	15.6
⑨ そ の 他	1	3.1

それでは、独居老人においてはどうか。調査対象となった独居老人の独居の理由は、・妻子に先立たれた(47.0%)、・ひとりで気楽に過ごしたい(22.5%)、・家族のものとうまくいかない(18.2%)であった。そしてひとりひとりの反応傾向をみると、気楽に過ごしたいの項目のみを肯定している者は少なく、家族のものとうまくいかないを同時に肯定している老人が多い。この反応には家族のものとうまくいかないから気楽に過ごしたいという感情があると思う。それ故、好んでひとり暮らしをしているとは思えない。

さて、ひとり暮らしになっての感じは次のようである。

表5 ひとり暮らしの感じ

選 択 肢	人数	%
① 気楽で楽しくなった	15	22.0
② ひとりでさびしい	20	29.4
③ 病気が心配で不安	29	42.6
④ 話し相手がほしい	8	11.7
⑤ 家族と一緒に暮したい	8	11.7
⑥ ひとり暮らしを後悔している	1	1.4

表5によれば、気楽でたのしくなったという者は22%で、これらの老人は家族関係も悪くなく積極的に独居生活に入った人たちであろう。そして、いわゆる「スプーンの冷めない距離」にあって家族のものたちの頻繁な訪問を受けている人たちであろう。しかし、多くの独居老人は病気の心配、さびしいという感情を訴えている。

次に、毎日の暮らしの中で不満があるとき、その不満に対して老人はどのように対処しているであろうか。この意味の間に対しては表6のような結果を得た。

この表から言えることは、不満があるとき居宅老人は信仰や仕事あるいは趣味などに没頭し不満を乗り越えて行こうとするのに対し、施設老人では我慢してあきらめることによって不満

表6 不満があるときどうするか

選 択 肢	居 宅 老 人		施 設 老 人	
	人数	%	人数	%
① あきらめて我慢する	11	6.3	13	40.6
② 誰かにぐちを言う	17	10.4	1	3.1
③ 部屋に閉じこもる	8	4.9	2	6.2
④ 信心でのりきる	77	47.2	7	21.8
⑤ 仕事や趣味にこってまぎらわす	30	18.4	4	12.5
⑥ 老人クラブ等でまぎらわす	11	6.3	0	0
⑦ そ の 他	8	4.9	0	0

を押し込めようとする。そして、誰れかにぐちを言ってうっ憤をはらすこともしない。ただに耐えるのみである。もちろん、居宅老人でも「その他」の項目で、・テレビを見るのみ、・涙を出してひとり泣く、と回答した老人もあって老いのかなしさが感ぜられる。

老人における「はりあい感」について

はりあい感とは何か。ここではそれを生きることへの意欲的な感情と定義したい。満足感が現時点における水平的な感情であるのに対し、はりあい感はあることがらを基底とする力動的な感情である。青年期にあっては、現時点での不満感が自己を奮いたたせ努力しようという感情をわきたたせることもある。はりあいとはそういう時に生れる感情であると思う。したがって、満足しているからといっても必ずしもはりあい感があるとは限らず、不満であるといってもはりあい感がないとは言いきれない。この意味で、『いま、あなたは生きるはりあいをもっていますか』という質問をした。そして表7のような結果を得た。

表7 はりあいの感情をもっているか (%)

選択肢	居 宅 老 人			独 居 老 人		
	男 子	女 子	計	男 子	女 子	計
い る	49.6	36.0	85.7	15.2	56.0	71.2
い ない	6.2	8.0	14.3	6.0	22.7	28.7

これによれば、居宅老人の85%、独居老人の71%が生きるはりあいをもっている。そして独居老人の女子にはりあいをもたないものがやや多い。次に、「くらしに満足しているもの」と「はりあいをもっているもの」との相関係数は0.81で、両者の間に深い関係のあることがわかった。また「満足していないもの」と「はりあいをもっていないもの」との相関係数は0.74で、これも相関が高い。つまり、老人にあっては現在のくらしに満足している者ははりあいをもっている生きており、逆ににはりあいをもっている者にはくらしに満足している者が多いと言うことができよう。

それでは、どのようなことがはりあいを持たせているのだらうか。これについて回答数の多

い項目から順次あげてみると、

▼居宅老人では、①健康である（25人）②社会奉仕活動ができる（15人）、③家庭が円満である（13人）、④自分のやる仕事がある（12人）、⑤神仏にお参りができる（7人）、⑥配偶者がいる（6人）、であり。

▼独居老人では、①健康である（7人）、②趣味のことができる（5人）、③神仏にお参りができる（4人）、④内職ができる（3人）、⑤愛の一声委員が親切（2人）、⑥年金がもらえる（2人）、である。

この間は記述式で回答を求めたのであるが高令者になるほど無答が多くみられた。しかし、やはりあいの原因となるものの一般的傾向はうかがえると思う。すなわち、居宅、独居老人とも健康であることがやはりあいの大きな原因となる。そしてその上に立って、居宅老人は社会のためになる活動ができること、独居老人は趣味のことができること、に分かれる。すなわち居宅老人では眼が社会的な面にひらかれ、積極的に動かうという姿勢が感じられる。それに対して、独居老人では環境より自己に眼がむけられ、精神的な安らぎを求めていこうとする傾向が感ぜられる。

さらに、やはりあいを持っていないと答えた者には『それはどんなことがきっかけですか』とたづね、さらに『そのときどのようにしましたか』を併記してもらった。

回答の内容を吟味してみると、これらのものは、①配偶者や子どもとの死別、②自己の身体的病氣、③自己喪失感、の3つに分けられると思う。

いま、その主なものを列挙すれば、

・夫と死別した。——ただ泣きました。（68才、女）

・長男が戦死した。——日本国民全体がそうだと思い自分を元気づけた。（65才、女）

など、肉身の死に遭遇し悲しみが襲うときが①の場合であり、

・重い病氣をした。——毎日心の中で泣いていた。（74才、男）

・10年ほど前片眼が失明した。——人生のはかなさを思い専ら神にすがった。（91才、女）

など、病いによって心身の自由が奪われるときが②の場合である。また、

・農地解放により財産をとられた。——先祖の墓前にて死を決しておわびしました。（70才、男）

・子どもに見すてられた。——自分が悪かったとあやまった。しかし赦してもらえなかった。（82才、女）

など、生きるよりどころとしていたものが失なわれ、あたかも魂の抜けでたような状態になるときが③の場合である。

また傍線の右側は、やはりあいをなくしたときの行動であるが、ここでも、深い悲しみを一身に受けて耐えていこうとする傾向がみられる。高令期ではやはりあいをなくするような事件にであえば、それは直ちに無常観、寂寥感を深め老いを自覚する契機となることが多いと思われる。このため、あきらめの退嬰的な行動が多くなっていくのであろう。

老人にとって「してほしいこと」、「やめてほしい」こと

老人はいま何を欲しているであろうか。これを知るために、『いま、あなたがしてほしいと思うことはなんですか』と、『いま、あなたがやめてほしいことはなんですか』という質問をした。回答数の多い項目から順に配例すると次のようである。

▼居宅老人——（してほしいこと）・年金を増額してほしい、・地方にも老人クラブ、福祉セ

ンターを設置してほしい、・よい医師にめぐりあわせてほしい、・精神的な面での老人福祉を考えてほしい、・安楽死をさせてほしい、・霊場めぐりをさせてほしい、・専属のつきそい人がほしい、・汚職役人、凶悪犯人を厳重に処罰してほしい、・テレビがほしい、・嫁がもっと親切であってほしい、・旅行をさせてほしい、

(やめてほしいこと)・過激派集団ののっとり行為、・物価の値上り、・若者の暴力行為、・テレビでのあからさまな恋愛行為、・過保護な接し方、・老人の力にあまる共同作業、・官僚の汚職、・老人クラブへ行けということ、・農民に対する偏見、・自動車ドライバーのバカ野郎よばり、・組合ストライキ、

▼独居老人——(してほしいこと)・老人クラブ、娯楽センターを近くにつくってほしい、・老人電話がほしい、・年金を増額してほしい、・勤め口をさがしてほしい、・息子たちとくらせるような家を建ててほしい、・家の周りの道路を修理してほしい、・ホームヘルパーが訪問してきてほしい、・友だちを紹介してほしい、

(やめてほしいこと)・老人ということば、・天皇に対する悪口、・町内の負担金、・老人を区別すること、・犬の放し飼い、・道の悪いこと、

▼施設老人——(してほしいこと)・テレビが十分みられるようにしてほしい、・食事の時間を長くしてほしい、

(やめてほしいこと)・他人のひどい悪口、・身体的な欠陥について言うこと、

以上、老人にとっての「してほしいこと」、「やめてほしいこと」を列挙した。この回答から次のことがうかがえる。すなわち、居宅老人ではかなり多くの要求が出されるのに対し施設老人になるに従い要求が少なくなる。また内容からみれば、居宅老人では社会奉仕をしたいとか、年金の増額とか、犯罪者への厳罰とかの社会的立場からの要求が出されたり、仕事をしたい、旅行がしたいなどの積極的な行動要求がだされているのに、独居老人では老人電話や息子たちとくらせる家とかの身近かなものへの要求が出ていること、施設老人では要求はあまり書かれていなかったが、回答の中では同居人や施設のきまりについてのつつましやかな要求が見られること、である。そしてこの老人の諸要求から、居宅老人には積極的に生きようとする建設的な態度、独居老人には現状を充実していこうとする現実的な態度、施設老人には集団生活の中であって自己を抑制していこうとし、そのために防衛的な態度となっていること、がうかがえる。

考 察 と 結 語

以上、岐阜市在住の老人においてみられる生活意識を概観した。昭和52年現在、岐阜市の人口は40万7220人で、そのうち65才以上の人口は2万9635人である。この高令者人口のうち居宅老人は2万8691人、寝たきり老人は650人、施設老人は294人である。このような老人数に対し調査対象者が少なく、その一般的傾向を知りうるに過ぎないが、一応この調査では次のようなことが言えるであらう。

①現在の生活の満足については、仮説のとおり居宅老人の90%強が満足していると答えている。施設老人においても71.4%の者が満足しているという。このことはうれしいことだと思う。そして、その原因は両者共に<集団の中でのいたわりの眼>である。「大事にされている」という思いと「身体に気をつけてくれている」という思いが満足感につながっている。また、<自分の果すべき役割>があることも満足感をもつための重要な原因であることが知られた。しかし一方、これらの満足感は本当の満足感なのであろうかという疑いが生じてくる。なぜな

ら、満足しているといいながらその理由を問う質問では無回答であったりするからである。ということは、一応は満足であるといいながら、つっ込んで問われるならば困惑して答えられないといった類いの満足感であるのかもしれない。つまり、満足していたという願いから、つい満足していると答えてしまった回答、いわゆる見せかけの満足であるかもしれないということである。また、調査対象となった人びとは明治・大正生れの老人たちであり、何ごとも不満はいけないという時代に生きたため、自己の心情を素直に表現しえないのかもしれないということである。

そして、不満のあるときの対処はあきらめて我慢するという没我的・消極的な姿勢がみられる。

②「はりあい感」については、居宅老人の85%、独居老人の71%が「はりあい感」をもっている。ひとりぐらしということから独居老人には「はりあい感をもつ者は少ないだろう」という仮説②は否定される。しかしここでも「はりあい」をもつて生きていたいという願いが肯定反応を多くしているのかもしれない。また、「健康であること」、「自分のやる仕事のあること」がはりあい感の原因となっている。

③「してほしいこと」、「やめてほしいこと」に関しては、仮説③のとおり居宅・独居・施設老人のそれぞれに要求内容の違いが感ぜられた。しかし、それは生活環境の違いからくるものであり、充実した生活を送りたいという願いは共通であるように思う。その中で特に目立ったことは、施設老人の回答者が36人中6人に過ぎないということである。これは記述式回答ということにも原因があるかもしれないが、施設老人には自己の思いを現わしたがる傾向があるためだと思われる。

かつてある施設で、筆者は老人たちが千羽鶴を折っているのを見たことがある。このとき、この人たちは言った。「もうなん日も折りつづけているんですよ」と。そしてつけ加えて言う。「何のために鶴を折っているのか自分でも分らない」と。おり紙の鶴が折れるほどの手先きの器用さを他の意味のある仕事に応用できれば老人たちにも生気が甦るだらうと思われるのだが、このために老人に接する場合には、現在もっている諸能力を生気あるものにするための配慮がつねに必要なと思う。

以上を総合していえば、老人に対して「満足感」、「はりあい感」を与えるものは≪周囲からのあたたかい眼≫、≪健康であること≫、≪仕事ができること≫である。つまり、老人にとって必要なものは「人間関係」「健康」「仕事」である。そして、これらは個々別々のものではない。すなわち、人間関係が円満であれば、イライラすることもなく心身の健康も保てるであらうし、心身が健康であれば、仕事への意欲も湧いてくる。このことが心のはりあいをもたせ、また逆に、心身のより健康な状態を保つことができ、家庭や地域社会での人間関係もよくなっていくのではないかと思う。

この意味で、「人間関係」については家族や地域社会の人びとと開放的なコミュニケーション関係ができるように配慮すること、そのために老人専用の電話、老人クラブ、老人憩いの家、老人福祉センターなどを活用していくことが必要である。「健康」については、心と身体の健康が望ましいことはいまでもないが、これには経済的な保障と老人医療の充実が望まれる。「仕事」については、すでに述べた高令者無料職業紹介事業のほか、定年延長促進対策、高令者雇用促進対策、高令者の能力開発対策、高年令労働者職業福祉センターの増設などの方策が進められていて、仕事の道はわずかながらひらかれつつある。そして、職業そのものに従事す

ることもさることながら、どのようなことでもいい、自己の趣味をもつことも老後を豊かに過ごすためには大切なことである。

以上、調査結果の概観を述べた。このような調査結果を思うとき、老人に接する者に必要なことは、老人が自分は家族あるいは社会にとって有用であるという思いをもってもらい、そして、この思いから老人が生活に意義を見出していけるように援助していくことであるが、この意味でも老人ケースワークの研究と人老人ケースワーカーの充実が望まれてならない。

参 考 文 献

日本福祉年鑑（昭和52年版），（1977）

橋 覚勝：老年学，誠信書房（1972）

孝橋正一編：老後・老人問題，ミネルヴァ書房（1976）